



津保
卷之
八
十一
終

9
3585
13



門才部
號 355
卷 13



或人此為下目錄

- 一 女地ゆ 所付徹しゆ 付り 上層を地ゆのゆ
- 一 基の基 双六貝合 奇貝批印の書
- 一 驚香を焼ハ連子におくけりる事
- 一 婦人の書 及人地ゆりる事
- 一 婦人云 義とせざるゆ 付り 古風上層まゆれ地ゆのゆ
- 一 香久喜 味若熟とらゆりる事
- 一 氣糖のゆ につわく 婦人あまのゆ
- 一 或同志 碑今絶と難ゆりる事
- 一 け書 炎起の女子へ愛文 援のゆ

明治二十六年十一月五日
坪内祐藏氏寄贈

口 9
3585
巻 13

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

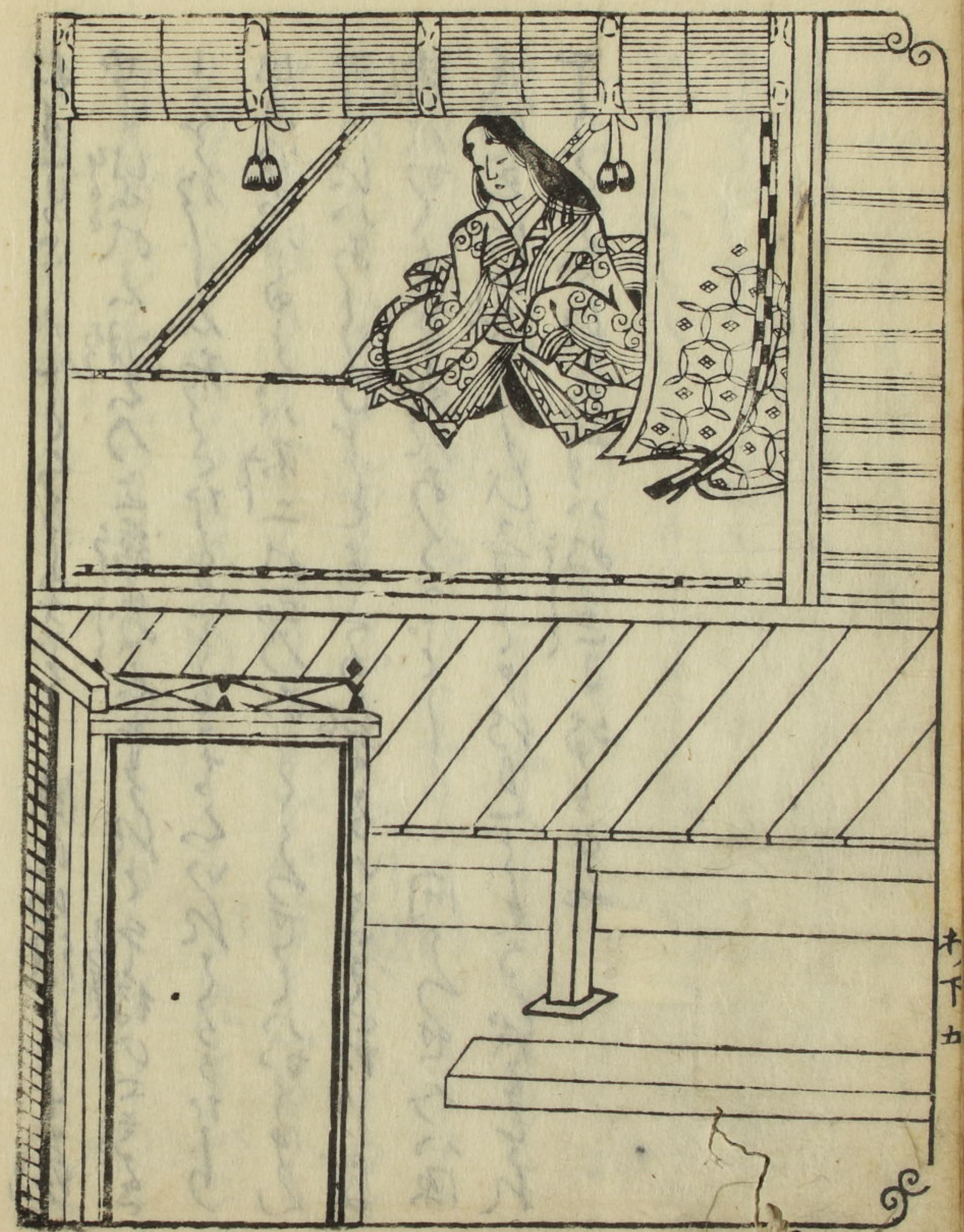
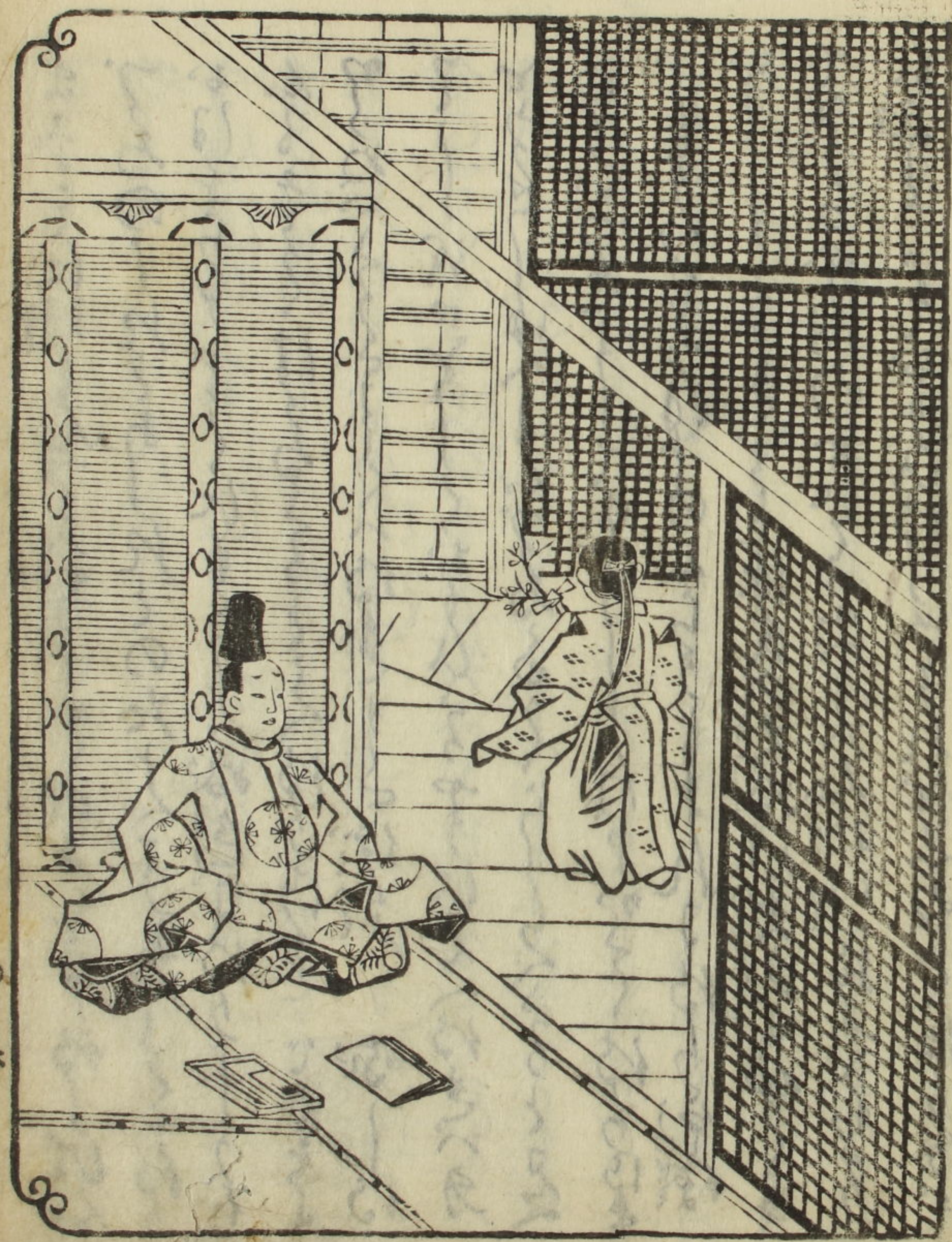
東京 芝罘 大久保
餘 町 百 拾 貳 番 地
坪 内 雄 藏

ある人のきつり
婦人同云々婦のケ際にも
のきつりといふとゆら
も拙者さきのゆら
たよとりゆらんハ
いんどうりゆらんに
まいたちあげゆら
はらゆらもゆら
ゆらゆらとゆら
たつゆら良くと
とゆらゆらば
トのゆらゆら

あつ二

さくおりのまゝしてゆくを知らぬこれいかに
にちまじりぬるひのくせは人とは是れ飛くともゆる
路ひくまき人風と方にあぢく我指給らんま
程くしぢららむとてなむと見せらるるせばい
かる増とたる事指とても定ぬ成定ぬよあぢく
二さし路びりの奥海とてあかたふぶすのゆるり
か飯もまがらうぢくゆり今をこしそむし
うせぬ人むとあむらあむらあむらあむら
女房もまぐもまぐにおめくつらけのゆるり
は清よとくくまの共増とれまの屏風とてむ
つどこのづらむくくづらむくづらむくづらむく
のおくたつたまむなるはのうらむくむく

じぶらにこころのよあつたつらむくくくくく
らんづりけもどろゆとたぐつあらんぞうば
きりぬくあむらぬわのいづれはとくくくく
ゆらん ままもももあむらむらむらむら
らばいそそゆとあつたつたつたつたつたつた
うくまゆとおぐらくくくくくくくくくく
ゆく原まるとみまるともつてのむらむらむら
あかたつてこころあつてむむむむむむむむ
れすにもんづり原氏むらむらむらむらむら
らんまみとむむむむむむむむむむむむむ
今何とては日増かまれのむらむらむらむら
づらけむむむむむむむむむむむむむむ



ますに...
づるの...
おは...
んも...
の...
こ...
と...
ゆ...
と...
で...
に...

書と...
た...
時...
の...
ま...
系...
今...
と...
そ...
言...
地...
づ...

やどりし女子のまゝりせぬ一紙の琴書にいとぬらけきで
も女子にしろしなるはまきしるれば琴書あつげり
つらりとたどりてせんや多くハ双六琴の琴書
つら中しりきひしりきせりとせば誰か
まじり女子ならんを何とぞなとせん會致と友と
せんらん人かんとなすむわらうハあつげりひく
もよじもよじもりたつハ基双六れわそびと
とにそかよ月なりらそとちげり居べり
がとよきなりぞくハ基双六にふとくおまじの
とより居りこそわけしお時の扱扱よそらんふ
か子にあつてはるらんハ又とわくおまじと
琴書と悪友とハぬらけきに入りのおほく
ありは美多しとく日何とらんゆとおそる
貝合といども賭よとれを情交りこぞとけくとい
どもけりぬらけきとわくそつわあいらふハ不
時乃るけりぬらけき人の沈きよとらんよ何のぞく
あつてつらぬらん女子におわく科の情交
も悪とよはは捨きりともとれり
同君子なるつらぬらけきせりぞと射の扱扱と
云有はれ女ハ論どくそつ不交りともとれり
とよとれりハ慈母のまやれとハなれり
或同慈母薫香掛巻のまやれつら達よに似たり
これとらつらつらハ禮記に徳角一
らる櫻海とつらつらハつらつらとつら

やどりし女子のまゝりせぬ一紙の琴書にいとぬらけきで
も女子にしろしなるはまきしるれば琴書あつげり
つらりとたどりてせんや多くハ双六琴の琴書
つら中しりきひしりきせりとせば誰か
まじり女子ならんを何とぞなとせん會致と友と
せんらん人かんとなすむわらうハあつげりひく
もよじもよじもりたつハ基双六れわそびと
とにそかよ月なりらそとちげり居べり
がとよきなりぞくハ基双六にふとくおまじの
とより居りこそわけしお時の扱扱よそらんふ
か子にあつてはるらんハ又とわくおまじと
琴書と悪友とハぬらけきに入りのおほく
ありは美多しとく日何とらんゆとおそる
貝合といども賭よとれを情交りこぞとけくとい
どもけりぬらけきとわくそつわあいらふハ不
時乃るけりぬらけき人の沈きよとらんよ何のぞく
あつてつらぬらん女子におわく科の情交
も悪とよはは捨きりともとれり
同君子なるつらぬらけきせりぞと射の扱扱と
云有はれ女ハ論どくそつ不交りともとれり
とよとれりハ慈母のまやれとハなれり
或同慈母薫香掛巻のまやれつら達よに似たり
これとらつらつらハ禮記に徳角一
らる櫻海とつらつらハつらつらとつら

のうかぶ... じれんた... の婦人... には
あり... せぬ... くにんづり... くにん... ぎ...
む... ぎ... ひの... ぎ... くにん... くにん...
は... の... くにん... くにん...
又人に... の... くにん... くにん...
おろ... くにん... の... くにん...
川... くにん... くにん...
... くにん... くにん...

もう... くにん... の... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...
... くにん... くにん...

とれ若らうといふもよむとぞう一町をまば婦人殿
のまばりたるをけて善と大よむらふもなり
向天とのいふなりは成りく福長禍無ハゆると
云我に昨あくともをばふももこ然にうつり
をり也バわらともをこれ義ありまハ人とみくを
すかよ人道とまば天もたがよ又人義の時ハ文
猪の踏ありとも尸とんをう

女師向云婦人れ云義とよむハ北總の田とらとい
ちり尸並女子何ともあををこも今又つちも
もおけをられんども農工爾ん人づらに女のお
りていいでく何いといとみゆり又ある後あ
死て子をもうらばももあつていふやとあはる

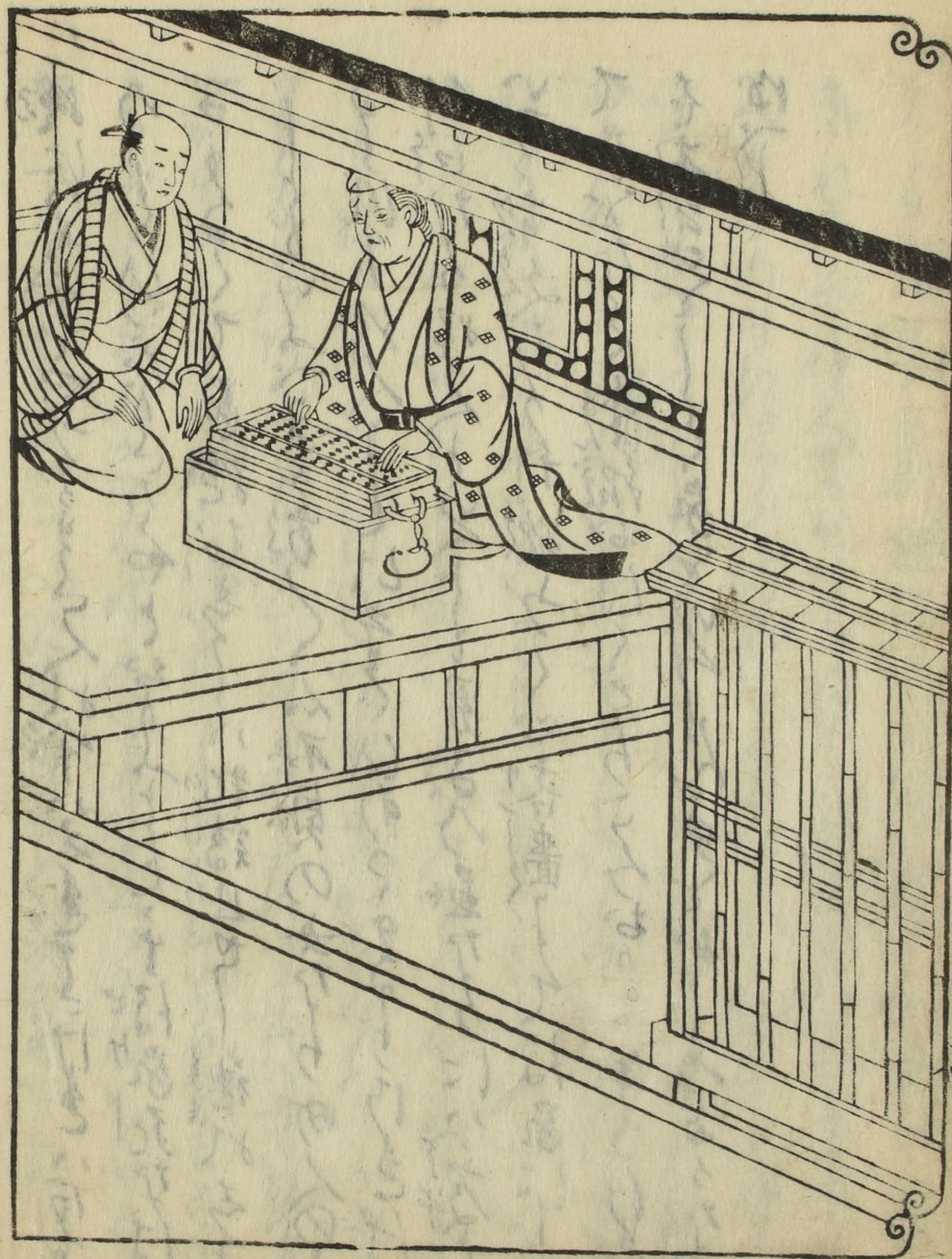
由かみゆりともとのさるらわもわつりくよれと
うも終りともんづらともも北總れ田とらたが
にともんづらをられんどもも海にいらるゆり
もんづらや 云農工れらつらハ皆物殺れ
まて云義とらるといハわつらつり愛愛とらつら
とこのみかり婦人肉とおにむらによ下をせとも
に飲食衣服より外ハおと一もまらむと田人百
也もまあり物あれまらまらしては海かならも
書にゆづらも細らるといふももまら下知にあ
らざるももはらむももももももももももも
まらした物あなるまらにゆりともももももも
町人ともももももももももももももももも

くまも 幼少より柳屋にさしひき給らんとはせむ
きしれはそ婦人よおとりのゆらんや武士れ業よりてハ
ふらうとわいの婦人の名をうらふしあはれを婦人
かえらんづつとあ男子にまゐる女はうとを
おとりの成人の事おまよとりなりてうとに
おとりの我は見えなくはあしおのこをいふ
はべー町人なりともかはんふれりてあらん
くも給らばまかりけしあれや女をさぐれりて
くもも女はあふどりやあれりあはれり子代なりて
かかちとりて或はいよあー又はは家業利あゆ
るありともおろかなる婦人とあまははやくや
わづらへりていふにさしひきもく我はあまは

海に其家とやううまい人れ余はまもさけきハ
のこらひたりてあやとあひとまほ死なば
さよなくてあ絶むあうハ北鶴目せし徳れあ
しよもいよべうあぐん不貞の女なり町人の
さしひきれ人よもはきまひあうさるりけは
柳はかり婦人ともども男子の互かりにハ
いつはあわり柳歎く心あきかへはあに
てあたまをさげおほくさるりさるりあまは
をまらひよくあまはさうとあまはあまは
はべー



あす十五



あす十四

るさうしりく黙しく見らるるたけはづぐにあり
徹ぶらに及まらりじり或大守れ邦人の約束
に出仕して来よしく下着すけ人病をらんべつと
まわがら以て役をせしめどもや人よこ
父をありて人情よしくとい人うけきば玉用
くらると若くかげく大守と其人必と知れしと
情しゆりしはるる其身豪傑榮たなまて一
れ月一人してれいしく日毎流る中
年久しきとととと病をせんをさく
さくさくしとととに役と侍せんといとれよ婦人
やあがむ風の上着よて夫よ謂くさくは四身い
まごさうりり今お刺と替はさうらりてん

今以身にけりてく業ある四身れ仁はすわく
殿にさうらりの其教と志す農工にまきて
忠義のありがれよい故よい志と芳儀と
祝す志るをこれ志は竟業此志にけり四身
ハ竟業乃風より功子孫に及ん忠孝仁惠に
まらり大威あり今病よけり職を侍しはる
まのしりし農工商ハ身はの良儀とさげ
ん志るを不忠の風うん諸君孔明ハ忠義は
軍旅に死すくさく四身時く保志は月と
か一移ひくせりて又十余までハ何とぞつと
はるる一はをわくを妻あるりし私家の別
勢りく四身乃志と胸ん公利をさうりり

幸の壽のそへにあらがり安じは為親の壽とて
らるゝはたなきけく平仲は玉ら〜と云ま
て感心〜爾は丈夫にまゝなりち〜むか
ふぶらりハ勢〜一ち〜一ち〜雨外等と
く牝鷄のち〜をやち〜ん事〜くま〜れ〜事
〜〜〜い〜おぶの下〜と〜は〜こ
らち家の長〜も人出仕の〜色〜くの
〜と〜と〜淋付終夜の月〜身の下〜と〜い
〜ん〜ち〜ぞ牝鷄乃〜を〜を〜ん〜公判七おに
い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
四五丈の〜は〜人〜ん〜ゆ〜と〜何〜の〜あ
ら〜妻〜月〜なり〜も〜意〜決〜乃〜の〜も〜す〜べ〜

か〜ありとい〜ども公判の〜も〜バ〜卒〜に〜女
い〜〜ハ〜丈夫の〜く〜り〜結〜つ〜〜と〜終〜ひ〜く〜と
〜〜〜〜〜の〜終〜く〜〜と〜ま〜の〜ま〜ゆ〜雨
志〜私家の〜は〜重〜と〜〜と〜終〜と〜け〜ぬ〜男
云〜乃〜の〜あ〜り〜く〜家〜の〜の〜や〜ず〜ん〜と〜け
婦人云〜志〜子〜志〜の〜人情に〜終〜〜終〜は
終〜い〜〜も〜志〜子の〜妻〜と〜して〜る〜と〜安〜の
女〜も〜わ〜り〜と〜ま〜る〜ひ〜は〜と〜ほ〜〜と〜ふ
と〜と〜に〜い〜〜と〜〜と〜にお〜ぬ〜ハ〜ん〜や〜く〜お
うせ〜とい〜り〜を〜せ〜り〜な〜れ〜職〜と〜を〜ま〜は〜し〜り
私家の〜ぬ〜は〜ま〜にお〜は〜す〜病〜氣の〜あ〜醫〜に〜あ〜て
お〜と〜つ〜〜と〜く〜は〜女〜に〜お〜長〜せ〜ら〜と〜く〜ぬ〜意〜

わが

てわへん出仕とてしつてのへんおはえんるへんま
 しげきとて仕女とてしつてのへんおはえんるへんま
 て衣服とてしつてのへんおはえんるへんま
 又とてしつてのへんおはえんるへんま
 余とてしつてのへんおはえんるへんま
 つらとてしつてのへんおはえんるへんま
 一とてしつてのへんおはえんるへんま
 つらとてしつてのへんおはえんるへんま
 寄持わらうとてしつてのへんおはえんるへんま



下下

け婦人いあつどく云ねの月とてし婦人にかう侍
りありふ所ゆありけ主婦のこつ幼少のとき我家
にござる記録とて何のふおぼくつらきしらす
主婦の性名とりしれらるゆにそはとてしれを記
録へ焼失たさしきとて今いんともさるゆなり
或同香色も味も香もぬれり人さしてあつげらなり
他類よおわくあつげらわらや女婦のそいん
えわりすかたら慈母のそは他世の髪にたくら
つて衣裳とららぬわらけ若衆者もあはれ
りあきすかたら香の香もぬれぬとてふかたの
はにりひだにたれば何ともしあつげらぬなり
おろり父も男女ともいんづらよらつて似合ぬと

にあはげるとあつげらぬの香もぬれくよお気
合をくうらにわけて似合ぬやうに仕立とけり
ゆいんづらり又なるが喜らち出すゆに他世
とおとしいとてはさちこれとてあつげらぬ
るもともぬかたれりのへらねり井の久よりて
ぬれらつとらるもさるぐりこり良くとあつげ
ぶりのおやう若衆のゆに雅音聲をいも命とま
あつれをいかにとてさあつげらぬの香悪よあつ
はらりいれとて知人ともさるゆに命をいも味なる
つしとていも平也食すゆに人主味とあつげら
香に食しとて飽さるゝ意味のさるゆに
本婦人女婦のす懐とていんづらと氣持のいんづら

吾とてその純の天に生りてしむるも小蛇の尾
をくちりふゆれられも老父がまじき長はるさしり
ふははらつら磨れりまぶさうもくは鳥のさぶら
おりよにされも予がま分吾とさうんもはかり直
臣女あめくむ父の女洲とんくいまご不象が御
戯言とんく邪言れ振とさくんをなれさうん来
書の人伝うしんふんとあしけりい予がま双紙とん
て女しれ志とさうむ父が女洲とんく大に達
そとくも幸ゆをこもにさうんは論ハ吾子と同
昔のそやがけ書他人の及分にしてまうんとはあ
らす意愛れぬあり一箇と清板よまゆれ事業
をうのそと事業言行女容格造りまうり即ち

はしとれまもとりへとせとせ日しけれ意もく
かまをましくまうりすまもしにつけあごもつち
ふもむつびいと業も枝はあかりせもつれ
ぐもつちのあわくしんくうらともさ
まもなうぬづれ人もなくうらうらあやせと
おりのくもさうんくもんそにむか
うあまうのぬいとしももむびくれ血潮
いおろふおりのかこも終ふもにらと終
しはかりひいさうらうらうらとんははく
せしけらうしに思らんしんけさ終
されどわがまはとまがえにりれれむむしとあ
はしつと今を志のむをぬらうらぬははく

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

元禄十一歳戊寅二月朔旦

長谷川町

御書肆松會三四郎板

有終

